

革命前のもっと穏やかであった時代でも、非法の地下出版物（政治的著作からポルノグラフィ―まで）には小型本が多かったという。国外の印刷所からこっそり運びこむのだから、本はかさばらない方が便利だったのである。

装丁、版型、扉のデザインなどの書物の外見は、テキストを読んだだけでは分からない著者と出版者と読者の関係をわたしたちに語りかけている。それは「本物」だけが持っている歴史の重みというものかもしれない。マイクロ化あるいはデジタル化された書物には、そうした歴史の感覚が欠落してしまう危険性がある。

特別展の開催にあたっては、多くの方々から支援していただいた。展示の目玉のひとつとなった

グーテンベルクについては図書館情報学系の寺田光孝教授、コメニウスについては教育学系の山内芳文教授からそれぞれ貴重な助言をいただいた。イギリスとフランスの百科事典については、文芸・言語学系の荒木正純教授と哲学・思想学系の谷川多佳子教授に解説を書いていただいた。その他、「読者論」については、歴史・人類学研究科院生の平正人君から最新の情報を聞かせてもらった。最後になったが、書誌情報の確認や図版の作成など、図書館スタッフからは全面的な支援を得た。充実感を味わえたのも、書物という実物がそこに介在していたからだと思う。

（たちかわ・こういち 歴史・人類学系教授）

私の一冊

足立 和隆

『歩行の進化と老化』

（てらぺいあ）

〔体芸・医学 469.4-Ki39〕



本書は、文部科学省科学研究費補助金の補助を受けて平成11年度から3年間行った研究「適応能としての二足歩行運動」の報告書である。この科研費の研究代表者である東京大学理学系研究科の木村賛教授（当時）が編著を担当し、各章は研

究分担者である自然人類学を専門とする研究者および運動生理学、人体解剖学、霊長類学、医工学を専門とする研究者、総勢18名が執筆している。第1部では、ヒトが進化の過程で一般のサルと分かれるきっかけとなった直立二足歩行が、ヒトの骨格や筋の形態に対してどのような変化をもたらしたのかということ、ヒトとヒト以外の霊長類においてそれらの形態を比較することにより明らかにしている。たとえば、京都大学の石田英實教授（当時）は、ケニアで発掘しナチョラピテクスと名付けたサルの化石に関する分析を記している。この種は、初期の類人猿と考えられており、この種から直立二足歩行を行うヒトの祖先が生じた可能性が高い。また、現世類人猿と化石人類の大腿骨と上腕骨の形態から、初期人類が直立二足歩行を始めるきっかけを考察した研究、ヒトの腰椎や骨盤の詳細な形態分析、頭部を保持するために重要な役割を果たしている胸鎖乳突筋の機能と形態に関する研究、さらには生態学的な面から霊長類の四足歩行を分析した研究がある。一方、第2部では、ヒトの歩行様式の変遷を筋の生理

学と下肢の運動という観点から分析している。ここでは、哺乳類の足部構造の比較解剖学および筋線維の組成（遅筋，速筋）の加齢変化に関する研究，筋中の刺激伝導速度と加齢との関係を示した研究，さらに高齢者の歩行や階段昇降動作を分析した研究がある。これらの研究の視点は，いずれ

大島 宣雄

『鍼通電療法テクニック - 運動器系疾患へのアプローチ』

大島宣雄監修；山口真二郎著（医道の日本社）

〔医学 492.52-Y24〕



本書は，監修者の指導下に「鍼による物理的刺激が血液循環系に及ぼす影響に関する研究」で博士号を取得した山口博士が大学院在学中に著したものである。同氏は鍼灸師の国家資格を有しており，その長い臨床経験に基づいて書かれた本書は，鍼通電療法の本格的な教科書としては国内初のものとして好評を博しているようである。

鍼通電療法は，筋肉のこりや腰痛，神経痛などにすぐれた効果を発揮する治療法であるところから，代替医療として現在では全世界で注目を集め，様々な症状の治療に応用されている。この治療法は，鍼灸師が行う触診によって凝った筋を見つけだし，そこに無痛で刺入された細い鍼を電極として微弱な電流を通し，それによって得られる

もそれ以前の研究では顧みられていなかったものばかりであり，新たな知見が随所に見られる。各章の導入部は，あまり専門的にならないように書かれているので，一般の方々にも十分に理解して頂けると思う。

（あだち・かずたか 体育科学系助教授）

生理反応を治療に応用する物理療法である。もともとは，欧米で痛みの治療に応用されてきた電気刺激療法と，中国や日本で行われてきた鍼治療が融合して生まれた治療法である。本書の基礎編（第1～4章）では，鍼通電療法が誕生するまでの歴史，装置の解説，安全管理，効果発現の生理学的メカニズムが丁寧に解説されている。本書の中核をなす第5章では，運動器疾患を治療するにあたって必要な技術を筋肉，神経，関節の治療部位ごとに解説がなされている。

一つ一つの治療技術の難易度が各項目の冒頭に示されているため，指導者は難易度別に実習を計画することができる。第6～7章では，各疾患ごとに診察から治療の手順について解説している。著者の経験から，この方法の有効性が高いと思われる高齢者の腰痛や膝痛の治療法については特に詳しく解説がなされている。また本書は，鍼治療の解説書でありながら，難解な東洋医学の用語を全く使用していないので，西洋医学を学んだ読者なら理解しやすい内容にもなっている。ほぼすべてのページに，解剖図，検査や触診の写真，イラストが掲載されていることも本書を分かりやすくするのに役立っている。本書によって，鍼通電療法が専門家以外にもより広く理解され，活用されることを願っている。

（おおしま・のりお 基礎医学系教授）